

A 国 語

(50分)

答えはすべて 解 答 用 紙 に書き入れること。

【この冊子について】

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子に手をふれてはいけません。
2. この冊子の2～4ページは白紙です。問題は5～17ページです。
3. 解答用紙は、冊子の中央にはさまっています。試験開始の合図後、取り出して解答してください。
4. 試験中に印刷のかすれやよごれ、ページのぬけや乱れ等に気づいた場合は、静かに手を挙げて先生に知らせてください。
5. 試験中、冊子がバラバラにならないように気をつけてください。

【試験中の注意】 以下の内容は、各時間共通です。

1. 試験中は先生の指示にしたがってください。
2. 試験中、机の中には何も入れないこと。荷物はイスの下に置いてください。
3. 先生に申し出ればコート・ジャンパー等の着用を許可します。
4. かぜ等の理由でハンカチやティッシュペーパーの使用を希望するときは、先生の許可を得てから使用してください。
5. 試験中に気持ちが悪くなったり、どうしてもトイレに行きたくなったりした場合は、静かに手を挙げて先生に知らせてください。
6. 試験中、机の上に置けるのは次のものだけです。これ以外の物品を置いてはいけません。
 - ・黒しんのえん筆またはシャープペンシル
 - ・消しゴム ・コンパス
 - ・直定規 ・三角定規一組 (10cm程度の目盛り付き)
 - ・時計 ・メガネ
 筆箱も机の上には置けませんので、カバンの中にしまってください。
7. 終了のチャイムが鳴り始めたら、ただちに筆記用具を置いてください。
8. 答案を回収し終えるまで、手はひざの上に置いてください。

このページは白紙です。

このページは白紙です。

このページは白紙です。

一 以下の文章は、建築家である筆者が、一九八〇年代の建築業界と、高知県梺原町での経験とをふりかえった文章です。読んで、後の問に答えなさい。なお、本文中の「Ⅱ」は、出題者の付けた注・解説です。

当時の建設業界は、江戸時代の武家社会のようだと僕は感じていた。戦国時代の社会は実際に武士を必要としていた。武士の力によって、武士の暴力によって、中世の日本は近世の日本へと脱皮できたのである。

平和な江戸時代がやってきて、もはや社会は武士を必要としなくなった。しかし、江戸幕府は、功績のあった武士階級を尊重し、彼等の特権を温存した。武士は士農工商の身分制度の最上位に位置づけられ、いばり続けることができた。日本社会は、一貫して温情社会であり、過去の功績、過去の特権は尊重され守られ続ける。

そして、すでに自分達が不要であることに気がついた人々は、自分達の倫理、美意識をエスカレートさせることによって、自身のレンデートル「Ⅱ存在意義」をアピールする。時代が転換する時、人間は昔から同じことを繰り返し、前の時代のエリートは、必死に延命を図った。江戸時代の武士は、まさにそのようにして武士道を尖鋭化し「Ⅱ激しくおし進め」、自分達の存在を正当化しようとした。戦国時代の武士は、倫理や美意識よりも、明日の戦に勝つことがまず大事な、現実的な人達であった。しかし、江戸時代に、転倒が起こる。

《中略》

1 80年代の建築の世界も、戦場を失った武士によく似ていた。第二次大戦後の日本は、確かに、建築を必要としていた。西欧に追いつくために、たくさんさんの建築を建て、速い鉄道を走らせ、長い道路を作る必要があった。それが、1970年の大阪万博の頃には、ほぼモクヒョウを達してしまった。戦場はなくなり、江戸時代のような平和な時代がやってきたのである。それでも、江戸幕府が武士政権であったように、1970年が過ぎても、戦後日本の政治も経済も、依然として建築主導であり、建築は作られ続けなければならなかった。作る必要のないものも、たくさん作らなければならなかった。無理に無理を重ねて行きついたその先が、80年代のバ

ブル経済であった。バブル経済は、土地の値段が根拠のない非常識のレベルにまで高騰した現象である。が、土地は土地の論理によって高騰したのではない。土地はその上に建築を建て続けるという圧力に押されて、根拠なく高騰したのである。

僕が飛び込んでいった80年代の建築業界は、様々な意味で、武士道が支配する、閉じられたイキグルしい世界であった。

《中略》

若い建築家から、一言アドバイスを求められると、「仕事がないことを大事にするといいよ」と答えることにしている。大抵、みんなそれを聞いてポカンとする。建築家は、依頼がないと建築を建てられない職業なので、どうしても仕事をとり走り回ってしまふ。画家と建築家とは、そこが一番違う。そうやって走り始めると、日々の仕事に追われてしまつて、こなすだけになる。自分の作っている建築にどんな意味があるか、社会が今どんな建築や都市を必要としているか、未来の人間がどんな建築、都市を必要としているかを考える時間がなくなってしまう。職人とじっくり話すという時間もなくなってしまう。ものを実際に作る彼らと話すことでこそ、建築にはリアリティが与えられ、生命が叩き込まれる。

86年にニューヨークからバブル真つ盛りの日本に帰ってきた時の僕も、そんな感じで、忙しかった。しかし、まったくありがたいことにバブルがはじけた。バブルという「祭り」が終わって、「祭りのあと」に投げ出されることになった。構原の仕事をはじめる前のバブルの時代は、東京の仕事に追われていた。職人とじっくり話す機会はまるでなかった。東京の工事現場は、建設会社のエリート社員である現場所長が仕切っていて、原則として所長としか話をしてはいけないというルールがあった。彼を通り越して、僕が直接職人と話して様々なアイデアを交換すると、コスト（＝値段）やスケジュールの点で面倒なことになるリスクがある。所長はその面倒を一番嫌う。話す相手は所長だけ、話題はコストとスケジュールだけというのが、都会の現場の決まりであった。「とってもいいデザインだと思いますが、何しろスケジュールがタイトな（＝ゆとりがない）ので、普通の収まり（ディテール（＝仕上げの細部））でやらしてください。コストオーバーで、スケジュールが遅れることも、絶対できませんから」というのが、すべての現場所長の口癖であった。

しかし、構原では違う時間が流れていた。この町と、²東京の現場とは、違う空氣が流れていた。構原に来て、谷に流れる霧を眺めていると、ゆったりしてしまつて、東京に戻ろうなどという氣分が消えてしまった。食べ物はおいしかった。米からして、味がまったく違つた。匂い米におまいという独特の香りのする米を混ぜて炊くので、白米が香ばしいのである。タイでこれと同じ香りの米を食べたことがあつて、タイ人はそれをジャスミンライスと呼びならわしていた。

現場でも、「職人とは絶対直接話をしないでください！」などというギスギスした雰圍氣ふんいきはなく、色々な職人と自由に話ができたし、友人にもなつた。昼間は、彼らが作業する脇で、彼らの手の動かし方を眺めながら、色々質問をぶつけて、そんなことも知らないのかと笑われた。大学では決して教われなかつた、建築という行為の秘密の数々に直接触れることができた。彼らが作っている脇で、僕もいろいろ注文を出した。「そんなことできるわけねえだろ」と、一蹴いっしゅうされることもあつたし、ギャクに「そんなの簡単だよ、かえつて手間がかかんねえよ。本当にそれでいいのか」などと、笑つて返されることもあつた。現場所長というマネージャーが間に入つたら、絶対起こらないようなやり取りができた。設計図を描いている時には思いつかなかつた、おもしろい仕上げやディテールを実現することができた。

たとえば、左官（「主に建物の壁を塗る仕事をする人」）の職人はいろいろと無理を聞いてくれるオヤジで、どこまで土壁の中にワラを入れられるかということに、二人で挑戦した。僕は普通の土壁は表面がツルツルしすぎていて、構原にはふさわしくないと感じた。土壁はヒビが入らないようにスサと総称されるワラや糸くずを混ぜるのが普通である。入れるスサの量を増やすと、普通の土壁とは違う素朴な表情が出るのがわかつて、ギリギリまでスサを増やしてもらつた。「こんなザラザラで本当にいいんか」「大丈夫、大丈夫」といった掛け合いをしながら、見たことのない壁ができあがつた。

千利休がデザインした待庵（京都府大山崎町）という国宝の茶室があつて——国宝の茶室は日本に3つしかない。あとのふたつは『蜜庵』（京都市、大徳寺塔頭龍光院）と『如庵』（愛知県犬山市の有楽苑に移築）だ——その黒い壁に、普通以上の量のスサが塗り込んであつて、その繊維だらけの壁が得も言われぬあたたかい質感で迫つてきた。東京の現場所長にスサを増やしてといっても、笑われるだけであつた。それが山奥で職人と仲良くなつて、意外なほど簡単に実現してしまつた。

いろいろな職人と友人になつたが、中でもユニークだったのが、オランダ人の紙漉職人、ロギールである。「変な外国人が、変な

紙漉しゅういてるんだけど、会いたかったら紹介しょうかいするよ」と、役場の若い担当者にいわれた。なんでこんな山奥にオランダ人がいるのだろうかと、不審ふしんに思った。それに、高知の紙漉きといえ、仁淀川にようがわ沿いそばが有名で、禰原ねはらと和紙という組み合わせも、意外だった。狭い山道せまを登っていくと、古いボロボロの民家があつて、そこでロギールが作業をしていた。捨てられた廃屋はいおくを見付けて住み込んだけれど、電気が来てないんだよという話だった。あんな真つ暗な中で、よく作業をしたり、暮らしたりできるものだと感心してしまつた。

人物がおもしろいだけではなく、作っている紙もおもしろかった。コウゾ〔和紙の原料となる植物〕の黒い樹皮が大量に漉き込んであつて、ザラザラだし、ゴワゴワしているのである。コウゾ以外の栗くりや杉すぎの木の皮を漉き込む実験もしていて、不思議なテクスチャ〔質感・感触かんしよく〕や色合いの紙が、床にたくさん転がっていた。紙の値段を尋ねたら、「いくらにしていいいかわかんないなあ」と答える。その一言で、ロギールと徹底的てつていてきにつきあつてみることにした。山で拾ってきた木の枝やつるに和紙をはりつけたロギールの手作りのスタンドも、今まで僕が使つたこともないやわらかな曲線が出て、気に入った。禰原の山奥にびつたりだと思つて、設計中の「雲の上のホテル」の全客室に置くことにした。

客室の壁は、ロギールの和紙を額縁がくぶちに入れて飾かざることを思いついた。普通はホテルの客室の壁には、版画とか写真を好んで飾る。しかし、山奥のホテルには、そんなこじやれたアートはふさわしくない。あの不思議な和紙は、額縁に入れるにふさわしい迫力はかりよくがある。

バブルがはじけたタイミングで、禰原に会えたことは、僕のその後の人生に大きな意味を持った。きつと、山にいる神様が、僕を呼んでくれたのだと思う。

僕がニューヨークでくわした85年のプラザ合意〔為替レートの安定化策〕をきっかけにして、20世紀をまわしていた産業資本主義から、金融資本主義へという大きな転換が起つた。金融資本主義とは、地面と切り離された経済学である。地面と切断されているがゆえに、値段は糸の切れた風船のように、限りなく高騰する。その高騰を人々は経済成長であり、繁栄であるとして錯覚する。そしてバブルの崩壊のように、突然に風船は破裂する。

禰原の人達は、そんなものと無関係に生き、生活している。彼らと寄り添い、その場所と併走することによって、建築は再び大地とつながることができるかもしれないという希望を手に入れた。禰原の職人達が、そのやり方を教えてくれた。バブルがはじけようと、どんな災害がやつてこようと、そんなことはおかまいなしに、大地をタガヤして作物を作るように、黙々と、ゆっくりと、建築を作り続けていけばいいのである。

バブルがはじけた後の90年代の日本を、「失われた10年」と呼ぶことがある。実際その10年間、東京では、ひとつの設計の依頼も来なかった。それでも、90年代はとても懐かしいし、楽しかった。それは、³禰原という場所と、禰原という方法と出会えたからである。

(隈研吾『ひとの住処』より)

問一 本文中の——部「モクヒヨウ」・「イキグル」・「ギャク」・「タガヤ」を漢字に直しなさい。

問二 ——部1「80年代の建築の世界も、戦場を失った武士によく似ていた」とありますが、「戦場を失った武士」のどのような点に「よく似ていた」のですか。わかりやすく説明しなさい。

問三 ——部2「東京の現場」、——部3「禰原という場所」とありますが、それぞれ、建築家の筆者にとってどのような所でしたか。わかりやすく説明しなさい。

二

次の文章は、柚木麻子『終点のあの子』の一節です。付属中学から女子高に内部進学した高校一年生の希代子は、高校でほかの中学から入学してきた奥沢朱里と同じクラスになりました。朱里の父は有名なカメラマンです。これを読んで、後の問に答えなさい。なお、本文中の「Ⅱ」は、出題者の付けた注・解説です。

希代子と朱里は急速に親しくなっていた。まだ、お互いの家を行き来するほどではないが、希代子はそれを最終ゴールに設定している。いつか朱里の家に行き、小説のような家庭をこの目で見るのだ。

神泉に住む朱里とは渋谷から一緒に通学できる。町田に住む森ちゃんとは、行き帰りを何時何分で合わせるといふ、はつきりした取り決めをしていなかったのが助かった。

とはいっても、朱里は遅刻ばかりする。学校に来ないことすらある。だから、井の頭線の前から二両目で彼女の笑顔を見つけると、その日はものすごくついている気分になった。お弁当の時間は、朱里が声をかけてきたときだけ、グループから外れるようにしている。今のところ、グループの皆に嫌な顔はされていない。

朱里はまんべんなくいろんなグループに顔を出している。それを目の当たりにして、少し悲しくなった。朱里は希代子だけでは退屈なのだろう。

昼休みにアツキーたちとバスケットをしているところを見た。放課後、保田さんたちと漫画を描いていた。図書室で秀才の星野さんたちと宿題をしていた。サブカル（「サブカルチャー」）好きなカトノリたちと、iPod（「音楽再生機器」）で相対性理論（「音楽グループのひとつ」）を聴いていた。さらに、クラスでも一番華やかな恭子さんのグループと、駅前のマクドナルドで雑誌を読んでいるのを見たときは本当に驚いた。

恭子さんは、高校入学組なのだが、クラスで一番堂々と振舞っている。学年で一、二を争う美人。お化粧が上手であまりにも素肌になじんでいることから、なっちゃん（「希代子たちのクラスの先生」）も注意しかねている。中部部からの早坂さん、綾乃ちゃん、高校からの山下さんと舞子さんが、彼女の取り巻きだ。

恭子さんの地位を確固たるものに行っているのが、放課後、学校の外に車を止め、大音量で音楽を流して彼女を待つ、大学生の恋人

の存在だ。希代子たちの学校は、恋人がいる生徒が少ない。男友達がいるというだけで羨望の眼差しで見られる。

学校の門を出るとき、ちらりと目に入る運転席の彼は、髪の色が明るすぎるホスト風の男だが、少しだけどきどきしてしまうのは、きつと希代子だけではないはずだ。

「EXILE『音楽グループのひとつ』を聴いている時点で、うちの的にはナシって感じ」と莫迦にしたように顔をしかめるのは、音楽に詳しいカトノリやなちゃんたちだけだ。

朱里は皆の注目を集めはじめている。国語と美術の成績が抜群にいい。希代子は、強引に同じ美術部に入部させた。休みがちだが、彼女が少しだけ手を付けた油絵は迫力がある。

平気で学校をさぼるし、遅刻もするのに、教科によつては、教師の間で一目置かれている。例えば、厳しくて有名な美術の高木先生も、発言が多い彼女を可愛がっている。そのせいか、好き勝手しても、不良っぽさなどどこにもない。

「学校来ないとき、どこで何をしているの？」

と訊いたことがある。うふふと笑い、彼女は嬉しそうにこう答えた。

「急行片瀬江ノ島行き」

下北沢駅のホームで、そのアナウンスが流れているのは毎朝聞く。その急行に乗ると、学校がある駅を通過してしまうから、聞き逃さないよう注意している。

「あのね、急行に乗って、江の島に海を見に行くの。人が少ない平日の砂浜をぶらぶらするの。波を見つめているだけで、すごく自由な気持ちになつて楽しいよ」

「希代子は完全に朱里に魅せられた。学校をさぼって海に行く——。その言葉は美しい音楽とか、宝石の名前のように思われた。

朱里は、メールの代わりによく手紙をくれる。手紙に添えられている四コマ漫画があまりに面白いので褒めたら、朱里は紺色の厚い表紙のノートに連載を始めた。朱里に断つて、森ちゃんたちに見せた。皆、感心していた。たちまち、口コミで火がつき、彼女の漫画はクラスでまわし読みされるようになった。しかし、朱里は唐突に、

「義務になったら、なんか嫌になった」

と言ひ、続きを描くのを止めた。

「あー、まじだるい。眠い」「行きたくないなあ」

希代子と朱里は笑いながら言い合っていた。朝の下北沢駅の下りホーム。学校に向かうため、各駅停車を待っていた。すぐそばには同じ学校の生徒が何人もいる。

ふいに朱里は目を輝かせた。

「いいじゃん、今日さぼろうよ。さぼっちゃおう。創作ダンスの練習なんてたるいし、美術の授業もないじゃん」

アナウンスが響き、各駅停車の電車がホームに滑り込む。希代子は笑いながら、

「そうしたいけど、そうもいかんでしょ」

一緒に乗ろうと促した。朱里はにこにこしながら動かない。希代子は、少し焦る。この電車を逃せば、遅刻するかもしれない。次にくる電車は「急行片瀬江ノ島行き」なのだから。

「ほら朱里、乗ろう」

希代子は、彼女の手をぐいと引つ張る。朱里は微笑んだまま動こうとしない。学校をさぼろうとしているのだ。彼女にとって学校をさぼることはなんでもない。しかし希代子にとっては重大事だ。朱里の自由な一日には憧れるが、それとこれとは別だ。さぼるのはまずい。冷たい汗が背中を伝う。大声で叫びたくなる。

家に連絡がいく。母をうまく誤魔化せたとしても、今日の創作ダンスの練習はどうなる。希代子なしで進むのか。皆に迷惑をかけるのではないか。

朱里からそつと離れようとする。

「無理なご乗車はお止めください」

あのアナウンス。もう走らないと。ほんの一メートルの距離なんだ。走らないと。朱里は、のんびりと笑っている。やっと自分が動けないことに気がついた。

強制されているわけではないのに、朱里の提案には退けられない何かがあった。学校をさぼりたいわけではない。しかし今、学校に行くことで何かを失う気がした。

シューッと、ダストシュートにゴミが落ちていくような音をさせて電車のドアが閉まった。ほんの一瞬^{いっしゅん}だけれど、ホームは水族館みたいに静かになる。

飛び出しそうだった心臓が、どくと大きな音を最後に静まった。ホームから同じ制服の女の子たちが綺麗^{きれい}に消えた。

「やった、キヨちゃん、これで一日一緒だね」

朱里は嬉しそうに希代子の手を取り、ぴよんぴよんと飛び跳^はねた。

2 曖昧^{あいまい}に笑いながら、本当の自分が乗るべき電車が学校めがけて細く消えていくのを、希代子は眺^{なが}めている。二人は、その後すぐやってきた「急行片瀬江ノ島行き」に乗り込んだ。確かにいつもの電車と違^{ちが}う。乗っている客がどことなく休日風の出で立^たちだし、人数も少ない。シートや手すりの色もレトロだ。

「なんかいいでしょう。この車内」

朱里はとびきりの秘密を打ち明けるようにささやき、青いシートに腰^{こし}を下ろし、身を数回弾^はませた。希代子は、電車の窓から見る慣れた風景が、いつもの数倍のスピードで荒々^{あらあら}しく消えていくのを見つめている。知らない世界に連れ去られていく手応^{てごた}えを、はつきりと感じた。

降りるべき学校の最寄^{もよ}り駅を通り過ぎた。こんな風にいつものホームを急行から眺めたことなどない。売店も階段の位置も、違っ見える。ホームにいる人の群れの中に、自分と同じ制服がいくつか目に飛び込んでくる。

希代子は泣きそうになりながら、あつという間に遠ざかるそれらを食い入るように見つめた。自分がどれほど守られ、安心して生活していたのか、はつきりわかった。あの場所に戻^{もど}る、なんとしてでも。

「ごめん。朱里」

勇気を振り絞^{しぼ}って朱里に告げた。

「私、次の駅で降りる。学校に行くね。行かないと」

必死な形相で叫んだので、数人の客がこっちを見た。朱里は驚いたように、希代子をしばらく見つめた後、明らかに面白くなさそうな顔になった。しぶしぶと「わかった」とつぶやく。次の駅までの短い時間、朱里も希代子も無言だった。

初めて降りるその駅は、半地下で、ひどく寒々としていた。希代子はほっとして、電車のドアが開くやいなやホームに飛び出す。「ごめんね」

電車内の朱里に向き直ると、媚びるように笑い、ぺこっと頭をさげた。

「意気地なし」

ドアが閉まる瞬間、朱里ははつきりとそう言った。希代子は頬が熱くなるのを感じる。ガラス越しの朱里は少しずつ遠ざかる。笑うでもなく、手を振るでもなく、ただ希代子を見ていた。希代子という人間を見透かすような、冷静で賢い目でずっと希代子を見ていた。

駅から全速力で走ったおかげで、遅刻は免れた。

翌朝、希代子は井の頭線の二両目で朱里を見つけたとき、怖くて泣きそうになった。朱里はもつとひどいことを言う気がした。希代子が希代子自身を完全に嫌いになっきらてしまうような、強くて毒のある言葉を。ところが、彼女は何事もなかったかのようにへらへら笑い、おはよう、と話しかけてきた。

「キヨちゃん、昨日はアレから散々だったよ。江の島に着いたのはいいけど、お金なくて、結局改札から出られなかったんだよねー」
香のんき氣に笑う朱里は、昨日の朝、希代子にシヨックを与あたえ、日常も気持ちもかき乱したことにまるで気がついていない。希代子の朱里に対する気持ちは、少しだけ曇くもった。筆洗いにほんの一滴、黒い絵の具が滴しただつたように。

《中略》

夏休みに入る少し手前だった。朱里は、東急ハンズにある画材コーナーを探索しようと提案してきた。

「私、あそこ大好き。なんでもあるじゃん。絵の材料だけであんなにあるのって、すごくない？ 一番変な名前の絵の具探して買おうかな。フォーゲットミーノットブルーとかさ」

「何それ」

「勿忘草の青って意味らしいよ。美術室の色辞典で読んだの」

その不思議な響きに希代子は惹かれた。

まだ、朱里の家に誘われたことがない。学校と一緒にさばらなかったことが影響しているのかもしれない。そう思うと、3しやべりかけてくる朱里の柔らかな頬や、屋上で投げ出される白い脚のすべてが疑わしくなる。

それでも、他の子と差をつけている部分もある。こうして放課後、寄り道に誘ってくれるようになったのだ。

二人は下北沢駅から井の頭線に乗り換え、渋谷にやってきた。夏の夕方のけむるような空気の中、文化村に向かう坂を上り、東急ハンズに辿り着く。画材のフロアは、朱里の言うとおりに、絵の具なら絵の具、クレヨンならクレヨンが色の波を作っていた。朱里は、希代子そっちのけでぐるぐると歩き回り、方々で歓声をあげている。結局、希代子がフォーゲットミーノットブルーを必死に探している。

「あれ、希代子ちゃん」

澄んだ声に振り返る。なんと瑠璃子さんがいるではないか。希代子の目は丸くなる。

「瑠璃子さん！」

「どうしたの？ 美術の授業の画材を探しに来たの？ あちらはお友達？」

瑠璃子さんは、黒いハイネックのカットソーを着ていて肩がむき出しだった。スケッチブックや本を入れた重そうなトートバッグが肩に食い込み、そこだけ赤くなっている。青白い肌との鮮やかなコントラスト「||ちがい」を見つめるうちに、希代子は吸い込まれそうになった。

「知っている人？」

ミルクの香りで我に返る。走り回っていたはずの朱里が隣にいた。希代子は、精一杯大人びた口調で自慢の友人と憧れの人をそ

れぞれに紹介する。

「こちら、美大院生（「美術を専門に学ぶ大学院の学生」）の瑠璃子さん。ママのお店で働いていたの。こちらは、同級生の奥沢朱里さん。ほら、前に話した奥沢エイジさんがお父様の、あの子です」

奥沢エイジの名を出した瞬間、瑠璃子さんの知的で冷静な目に、ぱっと高揚の色が浮かんだ。それは、なぜか切なかった。

「そうなの。私、写真集持つてるわ、あなたのお父様の駅を撮るアングル、大好きよ」

朱里は、まるで緊張するそぶりを見せず、人懐こく首を傾げ甘えるように瑠璃子さんを見ている。抜け目ない子猫みたいに。

「瑠璃子さん、美大の院生なんですか！ うわあ、話聞きたいなあ。美大を受験しようかなって考え中なんです」

瑠璃子さんがお茶をご馳走してくれるというので、希代子は慌てて、やっと青色の棚で見つけたフォーゲットミーノットブルーを握り、レジに走った。一本がお昼代くらいするその絵の具を、なぜ自分が買わねばならないのだろう、という疑問が胸をよぎる。一階で二人に追いついたとき、朱里がもう絵の具などどうでもよくなっていることを知った。

4 その夜、希代子はベッドの中で、その青い絵の具をなんども握り、凹ませた。蓋をあけてにおいを嗅いだ。その日は、間違いく大好きな二人と素敵な放課後を過ごしたはずなのに、なぜか心がざわついていた。瑠璃子さんの連れて行ってくれたカフェで、朱里も瑠璃子さんもひどく楽しそうに絵や映画の話をしていた。二人があまりに親しげだったので、少しやきもちを焼いているのかもしれない、と自己分析し、納得しようとする。勿忘草というのは随分寂しい色をしているのだなと思った。

問一

——部1「希代子は完全に朱里に魅せられた」とありますが、希代子は朱里のどのようなところに魅力を感じているのですか。これまでのこともあわせて説明しなさい。

問二

——部2「曖昧に笑いながら」とありますが、なぜ希代子は「曖昧に笑」ったのですか。希代子の気持ちにふれながら説明しなさい。

問三

——部3「しゃべりかけてくる朱里の柔らかそうな頬や、屋上で投げ出される白い脚のすべてが疑わしくなる」とはどういうことですか。説明しなさい。

問四

——部4「その夜、希代子はベッドの中で、その青い絵の具をなんども握り、凹ませた」とありますが、このときの希代子の気持ちを説明しなさい。

このページより後ろは白紙です。

受験番号
氏 名

一

問一

--

モクヒヨウ

--

イキグル

しい

--

ギヤク

--

タガヤ

し

問二

--

東京の現場

問三

橋原という場所

--

二

問一

--

問二

--

問三

--

問四

--